

非鉄金属

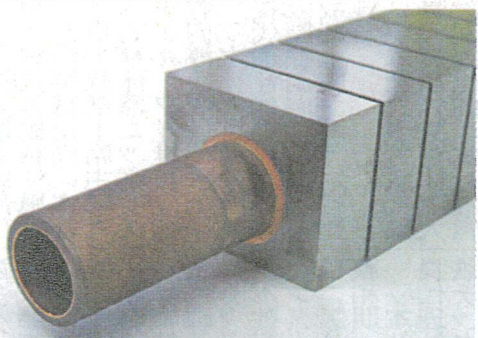
大和合金 熱核融合向け供給に注力 銅合金板材・管の採用増目指す

銅合金の鑄造品や鍛造品などを手掛ける大和合金(本社・東京都板橋区、社長・萩野源次郎氏)は、次世代エネルギーとして期待される熱核融合分野への銅合金の板材や管の採用増を目指す。すでに国際実験炉の案件で採用実績があり、今後は熱伝導率と強度を両立した銅・クロム

・ジルコン合金の板材や管で同分野での採用拡大を目指す。技術力を発揮できる領域での展開強化を狙い、萩野社長は「世界のエネルギー政策に貢献したい」と話している。

熱核融合は核分裂による現行の原子力発電と比べ環境負荷が小さく原料調達しやすい。現在は実用化への実証段階で実験炉プロジェクトが世界的に進められている。大規模な技術開発案件に使う素材には高い信頼性が必要。開発的な要素が非常に多く「採用に向けて取り組むことで技術力向上にもつながる」(萩野社長)という。

同社では板材・管とも溶解鑄造から一貫製造。同分野での受注に向け合金成分や鍛造・押出などの条件を厳密に制御し最適化している。板材は今月、フランスで建設が進む国際熱核融合実験炉(I-T E R)の第一炉壁用に供給する条件を満たしたことを意味する包括契約を、欧州の研究機関と締結。今後は最終的な納入を目指す。



管では熱核融合分野での使用を想定した特許を国内外で取得。さらに熱交換のための金属ブロックと組み合わせた部材サンプルの製作などして、実験炉の排熱ユニットを手掛ける重工業メーカーへのPRを強める。

る。今後は板材・管ともにコスト競争力の強化にも取り組む考えだ。萩野社長は「製造が難しく他社にできない分野に積極的に挑戦していくことが当社の存在意義」と意気込む。